秋の幼年童謡の中より（下）

葛原しげる

秋も最中きのふも今日も快晴つゞき、小庭の板塀に小蜂がとまつて、居眠りでもしてゐるのか、少しも動かない。大空には、一點の雲もなくて、どこからか、鳶のこゑ、澄んだこゑが聞えて來る。

見上げれば、鳶が一羽、高く高く輪をかいて舞つてゐるのです。兩翅を動かすとも見えず滑走するやうに舞つてゐるのです、ゆるやかに、なめらかに、如何にも樂しげに。

此のとんびの曲は、實は、曲の方が先に出來まして、その曲へ、歌をはめこんだのです。作曲者は、此の印象的な曲想の中に

ピンヨロー

の擬聲の入れ所を、豫想して、反復四回の註文でしたので、その他は、アクセントを重んじて入れるのに多少の苦心を拂ひました、ですから、本來は、

とべ　とべ　とんび　空高く
樂しげに　輪をかいて
なけ　なけ　とんび　青空に
ピンヨロー　ピンヨロー

ピンヨロー　ピンヨロー

とあるべきが多少、順序に無理が出來たのです。そこに、曲想と歌詞との提携連絡に、苦心があります。多くの場合まづ、歌詞があつて、その歌詞による曲が生れるのです。その順序を蹈めば、右の歌詞で、曲は、擬聲の反復で終りますから、やはり餘韻のある曲のものが出來るのでしたらう。しかし、此曲は、中央に、擬聲の反復があつて、最後に、「樂しげに、輪をかいて」の説明があるのですが、曲趣の豐かである爲に、餘韻も十分ですし、全部の統一も正しくて、まことに名曲であります。獨唱曲としても、實に引立ちます。それには、擬聲の歌ひ方に深甚の注意を要します。いかにも澄んで、いかにも滑らかに、歌はれねばなりません。さて、歌詞としては、第一節に

とべ　とべ
なけ　なけ

といつて、第二節が、之に答へる樣に、見てゐると、

とぶ　とぶ
なく　なく

といふのは、あまりに、工夫のない手法ですが、しかし、幼兒には、最も分り易い形式で、多くの中には、この明快なものもあつて宜いと信じます。

とんび

梁田貞氏曲

とべ　とべ　とんび　空高く
なけ　なけ　とんび　青空に

ピンヨロー　〳〵
ピンヨロー　〳〵
樂しげに　輪をかいて
とぶ　とぶ　とんび　空高く
なく　なく　とんび　青空に
ピンヨロー　〳〵
ピンヨロー　〳〵
樂しげに　輪をかいて

（「大正少年唱歌」第一集）

○

秋晴の陽のもとに、ごこにあつても、なよかに、すんなりとして、目につくのは、コスモスでした。「秋櫻」の異名も、花の形には、ふさはしいと思ひますが、櫻ほど、溫かさを感じさせません。どうしても、秋のものとして、澄んでゐて、やゝ冷えた感じです。そしてコスモスに、八重咲のものが有つては――出來ては、困ると思ふほどです。花瓣に射す日光は、花瓣の裏にまで透き通つて、花瓣を明るく見せるのでなくては、コスモスらしくありません。コスモスの語、それは宇宙をも意味します。宇宙にひろがる花ではありませんが、小さいながらもすく〳〵とのびて、何に遠慮するところもなく、しかも、弱い癖に、長い莖を思ひきり伸してゐる自然さは、人間に眞似の出來ないところです。

私にコスモスを歌つた三樣の舊作があります。しかし、どれも、右の心持以外に何もありません。唯コスモスは、多くの場合、群生させるものですから、小輪の花が、あち向こち向亂れ咲くところ、また、高く咲き、低く咲くところ、まる

で多くの幼兒が、めい〳〵に遊んでゐる樣子も見えるのを歌ひました。

清げなコスモスを、朝のものゝ見たのが前者で、

「庭一めんに　朝日をうけて」

「笑顔で　朝のあいさつするよ」

と特殊づけました。後者は、

「よろこんで――をぎつてる」

と、特殊づけました。

コスモス　　小松耕輔氏曲

すく〳〵のびて　コスモスさいた
眞白や　赤の　花うつくしく
　のこらず咲いた
　きれいに咲いた
庭一めんに　朝日をうけて
庭一めんの　コスモスゆらぐ
眞白や　赤の　花　みな　ゆらぐ
　あちらをむいて
　こちらをむいて

笑顔で　朝の　あいさつ　するよ

（「大正少年唱歌」第三集）

コスモス

弘田龍太郎氏曲

コスモス
コスモス
　うすももいろのも　白いのも、
　あつち向き
　こつち向き
　よく咲いて
日に　てらされて　よろこんで
風に　ふかれて　をどつてる

コスモス
コスモス
　垣根の外まで　伸び出して
　高く咲き
　低く咲き
　よく咲いて

日に　てらされて　よろこんで
風に　ふかれて　をぢつてる

（幼年童謡集、第三輯）

最後のは、コスモスに、こんぼを配した「コスモスボート」といふのです。之は、幼年童謡ではありませんが、面白がられてゐるもので、幼兒の中にも十分歌ひこなせるものがあるのでせうし、又、先生方が、幼兒に歌つて上げて下さる事も願はしいのです。

コスモスボート　　外山國彥氏曲

垣根の外まで　すく〳〵のび出て
眞上を向いて　一輪咲いてる
コスモスに　こんぼ　が　一ぴき
すーと來て
靜かにとまつて　動かない
背中に　お日が　ぽか〳〵と
ほんとに　氣持が　よさそうに
こんぼが　とまれば　ふら〳〵ゆらいで
あぶない花を　風が吹いては
なほ　ゆする
どんなにゆれても　じつとして

平氣で　ゆられて　うれしげに
こんぼ　は　ボート　に　乘つた氣か
ひろげた羽根に日があたる

何れにしても、コスモスは、すつきりした氣持のよい花です。一輪咲いても美しく、群れて咲いても美しく、秋にふさはしい花です。そして、雨に濡らされてゐても、やはり、目につく花です。雨の日のコスモスの濡れた美しさも、よい童謠になりませう。

○

雁は秋の空の旅行者、棹になり、鍵になつて、子供たちを大悅びさせます。一群の雁の先登をこぶ一羽は、首を右に、また左に廻しながら方向を定めて飛んで行きます。その樣を見て、地上の子供達は、騷を大きくして、

がん〳〵　かぎになれ
さをになれ
後の雁は　先に
先の雁は　後に
仲よく　わたれ

と、はやしたてます。すると、群の中の一羽二羽が聲を立てゝ、ないてくれますと、子供等は、「そら雁がないたことばかり、更に騷ぎを大きくして、またも、

がん〳〵　かぎになれ

さをになれ

です。その中に、眼界から去つて行つてしまふのですが、どこまで行くのでせう。池なら、この村にもあるものを、池まで越えてしまつて、どこへゆくのでせう、忙がしげに翅うちかはして行きますこと。

最後の「がん　がん　がん」は、親しんで呼びかけるのです。その曲が、また最も效果的でありますので、一度きいたら忘れられない曲だこいはれてをります。

雁　　梁田貞氏曲

がん　がん　渡れ
きれいに　ならび
つばさを　そろへ
おくれず　わたれ
　がん　がん　がん
がん　がん　どこへ
いそいで行くか
お山をこえて
お池をこえて
　がん　がん　がん

（「大正幼年唱歌」第七集）

○

秋の最中は、どこの里でも、秋祭り、豐年祭、笛や太鼓の音のよさ。その音をきいてゐるこ、もう、ぢつこしてをれないので、幼兒は、大人の仕度の出來るのが待遠くて、せきたてます。ぢれつたがります、大きいお姉さまは、まだお化粧中、お母樣は、まだ帶を結んでいらつしやいます。幼兒は、まづ、ちやんこ着換えさせて頂いて、下駄も、新しいのを、ちやんこはいて、下に下りて、待つてゐますのに。御門に立てた大幟が、風もないのに、ハタ〳〵動く—こは、ウソです、風は有るのです。しかし、ヒュラ〳〵ドン〳〵こ聞えてさへ來れば、ハタ〳〵動く樣に見えるのは、幟も、祭が好きで、嬉しいからでせう。都會の幼兒には、かうした樂しみがありません、氣の毒ですね。

お祭り　　小松耕輔氏曲

ヒュラ〳〵　ヒュ〳〵ラ　ドン、ドン、ドン

向の森から　太鼓こ　笛が

面白さうに　聞えて　來るこ

御門に　立てた　大幟

風も　ないのに　バタ〳〵動く

ヒュラ〳〵　ヒュ〳〵ラ　ドン、ドン、ドン

面白さうに　聞えて　來るは

お宮の　祭りの　神樂の囃

天氣の　今日は　日本晴

皆で　早く　おまゐりしませう

（「大正幼年唱歌」第七集）

此「お祭り」の歌でなく、幼兒には歌へなくても、先生か、お母様かに、歌つて頂きたく、幼兒に聞かして上げて頂きたい「お祭り」の歌があります。此は、擬聲の音樂が大層面白いので、學藝會等では、特に歡迎されてゐるものです。少し長いですから、全部でなくても、よいと思ひます。幼兒に最も歡ばれさうな節だけでも、歌つて上げて頂きたいと思ひます。

お祭　　梁田貞氏曲

朝から　ひゞくよ　面白さうに
おはやし　ひゞくよ　氏神樣で
ごん　ひやら　ひやらら
ごんひやらら
ごん　ひやら　ひやらら
ごんひやらら
おはやし　ひゞくよ　氏神樣で
晝でも　夜でも　ひゞくよ　ひゞく
鈴の音　ひゞくよ　お宮の前で
がん　がららん　ひゞく
がん　がららん　ひゞく
鈴の音　ひゞくよ　お宮の前で
めでたや　めでたや　豐年祭

これから　揃うて　おまゐりしませう
いざ　いざ　急ぎ
氏神様へ
これから　揃うて　おまゐりしませう

（「大正少年唱歌」第四集）

實は、右三節の他に、

鳥居のあたりは　左に　右に
竝んだお店が　あれ〳〵　きれい
きれいな　おもちや
きれいな　ゐほん
竝んだお店が　あれ〳〵　きれい
うれしや　御空に　雲さへ無くて
幟が　いくつも　はた〳〵竝ぶ
あれ〳〵　竝ぶ
あれ〳〵　竝ぶ
幟が　いくつも　はた〳〵竝ぶ

の二節も有るのですが、少し、長すぎるかこて省いたのです。然し、事情に因ては、此も歌つて聞せて上げて下さい。

○

秋の特色の一つは、木の葉が落ちる事です。それも、春、知らぬ間に木の芽が出てゐると同じに、知らぬ間に落ちはじめてゐます。思へば、自然の力は不思議です。

一體、どうして木の葉は落ちるのでせう。今まで、運動場の片側で、また、砂場のほとりで、よい日かげをしてゐてくれた木の葉です。それが、知らぬ間に落ちたのです。

幼兒にとつては、それを「何故」と怪しむだけの餘裕もなく、すぐ、

「やあ、よく日がさすやうになつた、やあ、あたたかい〳〵。皆、お出でよ、いゝなあ。」

などゝ、極めて、天下泰平であるでせう。それで、いゝのです。

唯、一本の木、それが、夏は、よい日かげをしてゐてくれて、その下かげで、皆を涼しく遊ばせてくれたのに、少し寒さに向ふと、その葉が落ちて、日あたりが善くなつて、そこで、溫かく、又、皆をよく遊ばせてくれるといふことは、まことに、有難いではありませんか。

こんな事に氣はつかなくても、幼兒は結構です。後になつて、かうした神祕的な事實、いえ、かうした事實に祕められたる不思議に心づく樣に、その芽生を、幼時植えつけて置く事が、幼兒指導者の一面の仕事でもあるでせう。此の童謠は、その目的で作つたのではないのですが、その役目をも果してくれさうです。特に

知らぬ間に落ちた

の一句を、尊重したいのです。又

日のさすところへ

皆　出て　あそべ

にも、意義はあるのです。

おち葉

小松耕輔氏曲

木の葉が　おちた
　すずしい　かげを
　　して　ゐて　くれた
木の葉が　おちた
しらぬ間に　おちた
何の木の　えだも
　　葉が　みな　おちて
　　よく　日が　さすよ
日のさす　ところへ
みんな　出て　あそべ

（「大正幼年唱歌」第三集）

○

秋もたけて、山また山は、紅葉して來ました。赤い色になり、黄色になり、美しく化粧しました。化粧して何處へ行くのか、とは、あんまり大きな問です。山の向ふのですから。しかし、今までは、緑の一色であつた山々が、一齊に、美しくなるのは、一體、何うしてでせう。

この疑問は、前の「落葉」についてと共に、一度は、起させてもよい疑問です。

するこ、

「今に、冬のおばあさんが來るから、お迎へに參ります」

こも答へるでせうか―なに、そんな事は、何の山だつて、返事なんかしません。しかし、さう考へて見る事は、出來ませんかしら。

もみぢ山　　小松耕輔氏作曲

赤いべべ着た　赤い山
きいろいべべ着た　きいな山
きれいな　べべ着て
どこへ行く

今に北から　ばあさんが
白いべべ着て　北風に
のつてくるから
おむかへ　に　　（「山の椿」より）

或人は、ポストが歩き出すこか、電信柱が歩き出すこいふ樣な想像は、コドモに非科學的な考へ方をさすから、いなけいこいひます。それも、さうです。此には又、別な考へ方もあり、導き方もあるでせう。こゝでは、此に依て、冬來る前の秋の紅葉の美しさを感じさせれば足ります。そして又、冬が、白いきものを着て、北風にのつて來る、こいふ考へ方を、覺えさせる事が出來れば中等學校になつてからなど、他の事物の鑑賞に際して、役立つ事もあるでせう。（をはり）